

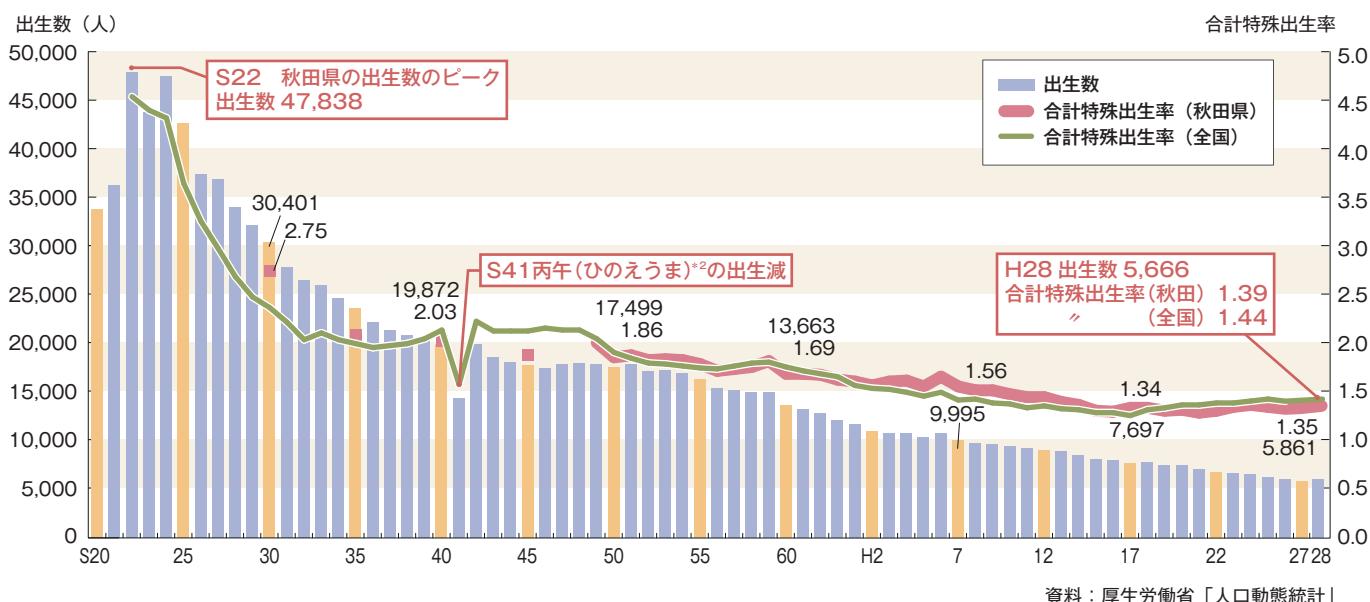
① 秋田の少子化の現状

秋田県では、1年間に生まれる子どもの数（出生数）が非常に速いペースで減少しています。このままでは、人口減少や労働力不足が進み、私たちの生活にも大きな影響が出てくることが心配されています。秋田県の少子化の背景や人口減少などについて考えてみましょう。

① 出生数の減少

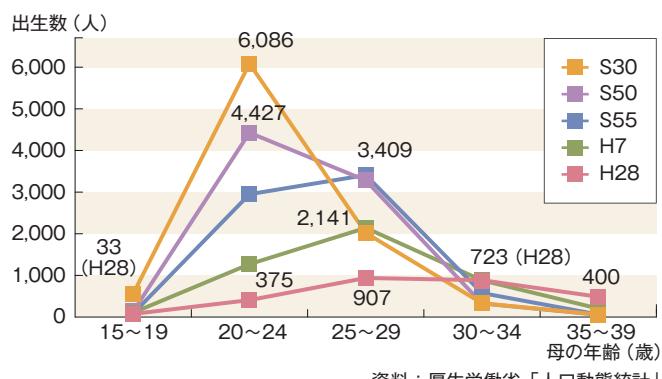
秋田県の出生数は、戦後の第1次ベビーブーム期（昭和22～24年）^{*1}の約4万8千人をピークに、その後減少が続き、平成28年には5,666人にまで減少しました。一人の女性が生涯に出産する子どもの数を示す指標を「合計特殊出生率」といいますが、この値が2.07以上ないと人口が再生産されず、最終的に社会が持続できないとされています。秋田県の合計特殊出生率は、ここ10年ほどは1.3台で推移しています。（①）

① 秋田県の出生数と合計特殊出生率



母親が最初の子ども（第1子）を生んだときの年齢を年（時代）ごとに比較すると、昭和30年では20代前半で生んだ人が最も大きい割合を占めていましたが、昭和55年には20代後半で生んだ人が最も多くなりました。平成28年では、20代後半と30代前半で生んだ人の差がほとんどなく、全体的に子どもを生む母の年齢が高くなっていることが分かります。また、それぞれの年齢ごとに生む子どもの数も急速に少なくなっています。（②）

② 秋田県の第1子を生んだ母の年齢別出生数



② 秋田県の人口減少の状況

秋田県の人口は年々減少し続けており、ピーク（昭和31年）の約135万人から61年後の平成29年には約35万人減の99万5千人まで減少しました。平成52年には70万人まで減少すると予想されています。（P3-③）

人口減少の要因を「出生数（増加）と死亡数（減少）の差（自然動態）」と「転入（増加）と転出（減少）の差（社会動態）」とに分けてみると、自然動態は平成5年に初めて死亡数が出生数を上回る自然減の状態となり、その後は減少幅が拡大しています。

一方、社会動態を見ると、県で調査を開始した昭和26年以降、常に転出者数が転入者数を上回る社会減となっています。そして、転出超過は大部分が20歳から29歳までの若い世代層によるものとなっています。（P3-④⑤）